A.ビダ他による『エジプトの思い出』

Souvenirs d'Egypte, par Alex Bida et E. Barbot. [1850] 〈K383.142-B〉

図書館司書二課　尾崎　弘美

ナポレオン軍のエジプト遠征（1798～1799）を契機に、東方への交易が盛んになった西洋では、異国への興味が増してゆくが、それは美術の世界においてもオリエンタリズムが流行する要因ともなった。

本書に収録されている作品は19世紀中頃のエジプトの情景である。当時のエジプトについては、ウイリアム・レイン著『エジプト風俗誌』[1] に詳しい。

ここに紹介する『エジプトの思い出』は、24枚の石版画で構成された図書で、前半は風景画、後半は人物画に分かれている。表題紙には著者としてビダとバルボーという名前が記されている。テキストは図に添えられたキャプションのみで、フランス語・アラビア語・英語で記されている。序文等はない。

前半12点の風景画を描いたバルボー（Barbot, E.）はフランスの水彩画家であり後半を描いたビダと共にエジプトに赴き100点以上の水彩画、25点のクロッキーを制作した。[2]

後半は12点の人物画が克明に描かれており、Hiler等の書誌に民族衣装の文献として本書が掲載されている。こちらの作者がビダ（Bida, Alexandre）で、作品にはAlex Bidaのサインが記されている。

標題紙の版画もビダの手によるもので、エジプトの母子が描かれている。母親の頭部に載せた篭の中には赤ん坊が入れられており、山羊を連れた子どもと歩いている。多分に感傷的で異国趣味にあふれている。

アレクサンドル・ビダは1813年（一説には1823年）南フランスのトゥールーズに生まれた。後にパリに出て活躍する。サロン展の常連となり、1848年と1855年に受賞している。オリエント風な作風を得意とする画家・石版画家で、後年は福音書の挿し絵などでも名をはせた。1855年にレジヨン・ドヌール五等勲章、1870年には四等勲章を受けている。彼は若い頃ドラクロワ（Delacroix, Ferdinand Victor Eugene 1798～1863）に２年間師事したが、むしろドカン（Decamps, Alexandre 1803～1860）やラッフェ（Raffet, Denis Auguste 1804～1860）の影響を強く受けている。ドカンは「ロマン主義的風俗画、とくに近東旅行による異国情緒

図1　ヴェールをかぶった女

の油絵、狩猟を主題とする風景画などを制作」③しており、代表作に『トルコの思い出』(1846)がある。

ビダも近東へ旅行し、多数のスケッチを残した。わかっているだけでも彼は1844年、1850年、1855年の3回当地に滞在している。水彩画も描いたが、主に石版画で世に認められた。

本書は、フォリオ判(55×40㎝)で、頁付けはなく、各ページに1点ずつ石版画が収められている。パリのLemercier社によって出版されており刊年は明記されていないが、各種の書誌によれば1850年頃と思われる。

後半12点の人物画のキャプションは次の通りである。

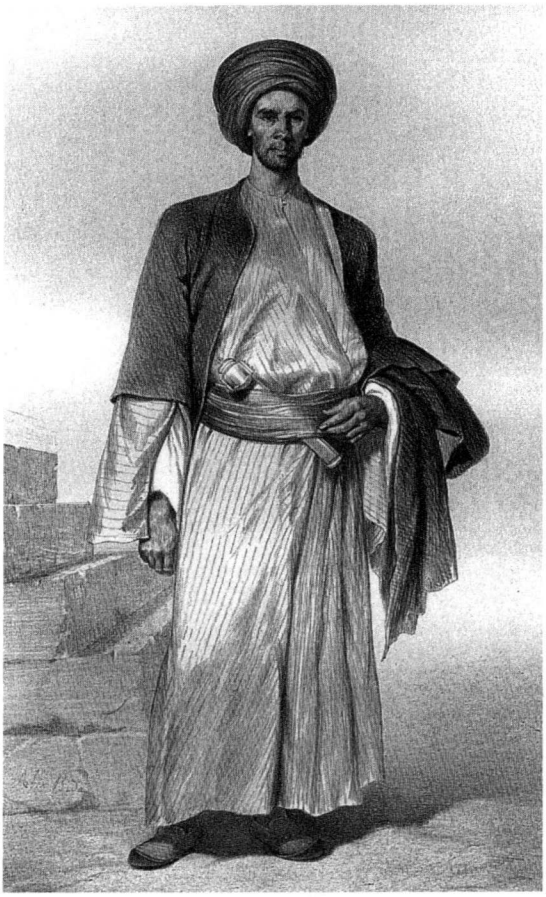

図2　コプト人(代書人)

1. ヴェールをかぶった女 ―図1
2. カイロの上流婦人
3. ダラブッケを演奏する少女
4. コプト人(代書人)―図2
5. ヒジャーズのアラブ人
6. 小自作農の女
7. ロバを引く人
8. カイロの小作の少女
9. ARNAOUT(アルバニア人)
10. サイス(馬丁)
11. ヌビア人
12. 踊り子(エジプトの舞姫)

バルボーの手による風景画も遠い異国としてのエジプトへの憧れを誘うような物静かな雰囲気がある。ビダの緻密な石版画と共に、当時のかの地への興味を見る人にかきたてたであろう。ロマン派のエキゾティスムをここに存分に見ることができる。

図版解説

図1　ミラエー(milayeh)という青と白の格子縞の、二枚の布地をつなぎあわせたものを外衣として用いている。黒い顔覆いブルゴ(burko)=ヴェールの上部には小さな飾りがついている。小さな金貨やまがいものの真珠などが用いられている。

図2　シャツの上にカフタン(kaftan)を着て帯を締め、頭にはターバンを巻いている。帯にはさんであるのは銀、真鍮または銅などでできた矢立て(インク、ペンを入れた容器)である。

---

①『エジプト風俗誌:古代と近代の奇妙な混淆』
ウイリアム・レイン著　大場正史訳　桃源社　1977
〈382.42-L〉
原書はEveryman's Libraryに収められている。
〈083-E-TR21〉
数年にわたるエジプト滞在をもとに、多数の木版画を挿入して、風俗・習慣を克明に描写している。

②前半の風俗画にはバルボーの名に加えてCicéri刷、C. Bour画と記述されている図版も数点ある。二人とも同時代の画家・石版画家である。

③『新潮世界美術辞典』新潮社　1985　〈R703.3-S〉